様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　5 月　7 日現在

機関番号：35413
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2012
課題番号：21720215
研究課題名（和文）個人差・学力差に対応した，動機づけの低い学習者の動機づけを高める教育支援研究
研究課題名（英文）Enhancing low-motivated learners: From the viewpoint of individual differences
研究代表者
田中　博晃（TANAKA　HIROAKI）
広島国際大学・看護学部・講師
研究者番号：80441575

研究成果の概要（和文）：
本研究では，動機づけの低い学習者を対象にした「動機づけを高める方略」（*Motivational Strategies*）の確立を目的としている。質的研究の結果を「自己決定理論」（Self-determination theory）から裏づけを行い，動機づけを高める方略の開発を行った。それを用いた実験授業を行い，その結果，この方略は学習者の 3 つのレベルの内発的動機づけを高める効果が確認された。特に学力の観点では，TOEIC で 500 点程度の中レベル程度の学習者に効果的であることが分かった。

研究成果の概要（英文）：
The present study reported here was to develop the motivational strategy for low-motivated EFL learners and examine its enhancement effect on intrinsic motivation in three levels. This study consists of two case studies and one quasi-experimental study. Qualitative and quantitative data were analyzed for this study. The results provide compelling evidence that teachers' motivational strategies cause enhanced intrinsic motivation in low-motivated learners. The strategy was effective especially for intermediate level learners.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
21 年度	800000	240000	1040000
22 年度	600000	180000	780000
23 年度	700000	210000	910000
24 年度	600000	180000	780000
年度			
総　計	2700000	810000	3510000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：英語教育一般

１．研究開始当初の背景

動機づけを高める研究は国内外の動機づけ研究の学問的方向性（Guilloteaux & Dörnyei, 2008; 廣森, 2006）に一致する上，「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」の重要な一端をも担う。特に英語教育実践を行う教員にとって，動機づけの低い学習者の扱いは難しい問題である。動機づけの低い学習者をターゲットに，動機づけを高める授業実践法を開発することで，英語教育実践への貢献を意図している。

２．研究の目的

本研究の目的は，学習者の多様な個人差や学力差を加味した上で，動機づけの低い学習者の英語学習への動機づけを高める授業実践法を確立することである。またそれを広く英語教育実践者に使用できるように，Web 上にて公開する。ここでは本研究の骨格にあたる，実践法の効果検証を中心に述べる。

３．研究の方法

まず日本人英語学習者を対象にした実践的な研究が少ないため，第 1 段階の仮説生成では質的データを収集する。ただし KJ 法（川喜田，1986）などの質的分析法は先行研究などの理論的枠組を使わずにデータから新しい知見を生み出す方法であるが，動機づけの理論的知見は膨大に蓄積されており，それらを利用するメリットもある。よって本論では質的データからボトムアップ的に仮説を生成しながら，先行研究の理論的な知見も活かせるように，質的データの量的分析を行う。よって，本論では英語授業レベルの動機づけが低い学習者を対象に動機づけを高める方略を作成（仮説生成）し，その効果を検証（仮説検証）し，さらにその方略を深化・拡張（仮説継承）させた上で，効果の再検証（再仮説検証）を行う。

４．研究成果

4.1. 研究 1（仮説生成）

本研究の目的は，英語授業レベルの動機づけが低い学習者の動機づけを高める方略の作成である。調査協力者は広島県内の大学生 1 年生 52 名で，10 月の第 1 回授業時に質問紙調査をした。質問紙は 3 部構成で，第 1 部が動機づけ（特性レベルの動機づけ（α = .84），英語授業レベルの動機づけ（α = .86），リスニング活動への動機づけ（α =.73），スピーキング活動への動機づけ（α =.86)),第 2 部が 3 欲求(自律性(α =.62)，有能性（α = .89)，関係性（α = .98)),第 3 部が自由記述（学習者の英語の好きか嫌いかを問い，その理由を記述させる形式）である 2。研究 1 は仮説生成の段階なので，第 1 部のデータを用いて調査協力者の絞込みを行い，第 3 部の質的データを基に仮説の生成を行う。第 2 部のデータはこの段階では分析対象とせず，研究 2 で用いる。

仮説生成の前に分析対象の調査協力者を絞り込む作業を行った。4 つの動機づけの項目の内，英語授業レベルの動機づけと特性レベル動機づけが 7 件法で M = 4.00 未満の学習者を選んだ結果，9 名の学習者が該当した（英語授業レベルの動機づけ M = 2.50（SD = 0.89)，特性レベルの動機づけ M=3.08（SD= 1.01))。これらの学習者は英語授業レベルの動機づけが極めて低かった。

次に，調査協力者の自由記述データをアイデアユニットに分割し，学習者の記述内容に基づいてカテゴリー作成を行った。分析の際は著者に加えて応用言語学の知識のある教員 1 名の合議で最終カテゴリーの決定と分類を行った。カテゴリー作成の際は小カテゴリーから先に作成した後に，より大きなカテゴリーへと集約するボトムアップ形式をとった。

その結果，調査協力者の記述は 3 つの大カテゴリーと 6 つの小カテゴリーにまとめた。最も頻度が高かったのは「楽しさ・興味」であった。さらに A. の中に 2 つの小カテゴリーがあり，a.「楽しくない・興味を持てない」に 5 つの記述が含まれた。代表例として「あまり「楽しい」と思う瞬間がないから」,「自分の興味がもてない分野である」などが挙げられる。一方，英語授業レベルの動機づけは低いものの，「映画など観ているときに今まで習ったことのある単語などが聞き取れて意味がわかるとうれしいから」という肯定的な記述が 1 件のみ見られた。以上を総合すると，英語学習に対して楽しさや興味がもてる教材や授業運営方法が英語授業レベルの動機づけを高めることに有効だと考えられる。このような楽しさや自分自身の興味とは，まさに内発的動機づけの源泉となる要因である。

また，英語が「分からない・不得意」という記述が 3 件あった。そこで学習者が英語を分かった時の知的な喜びを提供することで，不得意感を減らす方法が有効だと考えられる。本論の調査協力者は英語学習に不得意感を持っているが，TOEIC のスコアは M = 513 である。2011 年度の大学 1 年生の TOEIC のスコアは M = 421 であることから，学習者の英語運用能力は平均以上と言えよう。よって難度の高いタスクを与え，それを達成することで知的な喜びを獲得できるような方略が有効と判断した。学習成果に対する達成感を得ることで，「自己決定理論」（*Self-determination theory*, Deci & Ryan, 1985, 2002）が提示する有能性の欲求の充足につながる。

以上の結果から，学習者の興味・関心を惹きつけながら，学習者にとって難度が高く，成功経験の得られる教材と授業活動が必要と判断した。そこで，動機づけを高める授業活動として，コミュニケーション活動の教材に外国のドラマ・映画のシーンを用いた。外国ドラマ・映画を教材にすることで，通常の教材よりも学習者に聞くこと，話すことへの興味関心を持たせられると考えられる。同時に自然な速度で話される英語を聞き取ることは難度が高いため，本研究から得られた 2 つのキーワードを同時に満たせると考えられる。

次にこの授業活動に自己決定理論で裏付けを行い，動機づけを高める方略として整備する。自己決定理論では，動機づけを高める要因として3欲求を提示している。それが「自律性の欲求」(*need for autonomy*)，「有能性の欲求」(*need for competence*)，「関係性の欲求」(*need for relatedness*) である。この3欲求を満たす仕組みを授業活動に取り入れることで，上記の活動が動機づけを高めるための方略として機能する。

まず学習者の自律性の欲求を満たすために，授業中に学習者のペースで学習できる時間を設定した。特にリスニング活動時は，各学習者に割り当てられたパソコンを使うことで，外国ドラマ・映画の音声を個人の学習スピードにあわせて聞き取りができる。スピーキング活動ではペア活動を中心にタスク活動を行うが，ペアによってタスクをこなすスピードに差がある。よって，早く終わったペアには応用タスクも準備し，各ペアの学習速度にあわせて学習活動が進められるようにした。

有能性に関しては，外国ドラマ・映画のリスニングという難易度の高い課題の達成によって有能感が満たされると考えられる。自然な速度で話される音声の聞き取りは難易度が高いが，会話で使われる語や表現は学習者が中学や高校で既習のものが多い。そこで新規学習事項を事前に指導し，リスニングでは未習事項が含まれないように工夫した。またスピーキング活動では，言語材料の提示だけではなく，会話の流れの中でどのように表現すると英語らしくなるかや，日常の何気ない言葉を英語にするとどうなるか，と問うことで，学習者の知的好奇心の喚起を試みた。また言語材料をペアで繰り返し練習することで言語材料に慣れさせ，さらにそれらを使った応用的な活動も入れることで，より学習者に言語材料が定着しやすくなると考えられる。

関係性の欲求に関しては，ペアでのスピーキング活動によって学び合う雰囲気が形成される。ペア活動中は，教員は机間支援を行い，適宜，学習者に助言を行う。リスニング活動中は，学習者がパソコンを使って個人学習を行うため，他の学習者や教員との関わりはなくなる。しかし教員が机間支援を行って，学習者の誤りやつまずきに対してアドバイスを与え，教員に質問しやすい雰囲気を作ることで，関係性の欲求が満たされると考えられる。

このように外国ドラマ・映画を用いた授業活動に自己決定理論を理論的背景にすることで，動機づけの低い学習者の動機づけを高める方略として位置づけられた。本論では，この方略を「外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーション活動」と呼ぶ。以上のように研究1で動機づけの低い学習者から集めたデータと動機づけ理論の知見を応用して，動機づけを高める方略を開発した。ただ，この方略は効果検証がされておらず，方略としては仮説段階にある。よって研究2で方略の効果検証を行う。

4.2. 研究2

研究 2 では，研究 1 で提案した外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーション活動によって，動機づけが低い学習者の動機づけを高められるか検証を行う。ただし研究2は予備調査として，方略の実施可能性と効果の確認に留めるので，調査協力者は研究1と同様の調査協力者9名のみを対象とする。

測定は研究 1 の質問紙とデータを用いた。分析対象は，第1部の動機づけと第2部の3欲求のデータとする。研究1のデータをプレ測定とし，外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーション活動を用いた授業を行い，第 8 回の授業時間にポスト測定を行った。なお本研究は限られた調査協力者に対する予備調査なので，有意差検定は行わずに記述統計量の検討を行った。

動機づけと3欲求の平均値，それらのプレからポストへの変化値を算出した。

その結果，最も大きな上昇が見られたのは，授業活動レベルの動機づけであった。リスニング活動への動機づけは M_{diff} = 1.07，スピーキング活動への動機づけでは M_{diff} = 1.00 の上昇が見られた。また英語授業レベルの動機づけは M_{diff} = 0.50 の上昇が見られたが，特性レベルの動機づけはほぼ無変化であった（M_{diff} = 0.08)。動機づけを高める要因である3欲求は自律性（M_{diff} = 0.64)，関係性（M_{diff} =0.61）が高まっており，有能性（M_{diff} = 0.11）は微増にとどまった。よって，この方略は授業活動レベルの動機づけに対して最も効果的だったと言えよう。

これは9名という限られた調査協力者での結果であるが，方略は授業内での運用上問題はなく，ある程度の動機づけを高める効果が確認できた。よって次の調査では，調査協力者の数を増やした検証作業を行う。

4.4. 研究 3

本研究では，研究2と同様に動機づけの低い学習者を対象に教育的介入を行う。しかし，自然発生クラスでは動機づけの低い学習者だけが集まっているわけではないため，研究 2 と同様に動機づけの低い学習者を選ぶ必要がある。そこで2009年度と2010年度の大学1 年生の一般教養英語クラスの内，著者が担当した4クラス116名の内，英語授業レベルの動機づけが低い学習者を分析対象とした。全 15 週の授業期間の内，第 1 回目の授業でデータ収集を行い，授業レベルの動機づけが

7 件法の質問紙で中間得点の M = 3.50 以下の学習者を選んだ結果，本研究の調査協力者は 43 名となった。

動機づけと 3 欲求の測定は田中（2010）の 7 件法の質問紙を用いた。動機づけは特性レベルの動機づけ（α = .81，.84），英語授業レベルの動機づけ（α = .73，.94），活動レベルの動機づけ（リスニング活動への動機づけ α = .76，.79，スピーキング活動への動機づけ α = .80，.88）の測定を，3 欲求は自律性（α = .61，.87），有能性（α = .86，.92），関係性（α = .85，.84）の測定を行った。データはプレ測定とポスト測定の合計 2 回で収集した。プレ測定は後期の第 1 回目の授業時間で，ポスト測定は第 7 回目の授業時間であった。

調査協力者の動機づけと 3 欲求の記述統計量，プレ測定からポスト測定の変化値，効果量（r）4 を算出した。その結果，特性レベルの動機づけはやや上昇し，効果量は中程度であった（M_{diff} = 0.38，t (40) = 1.96，p = .06，r =.30）。一方，それ以外の動機づけは大きな上昇が見られた。英語授業レベルの動機づけ（M_{diff} = 1.59，t (40) = 7.48，p = .00，r =.76），リスニング活動への動機づけ（M_{diff} = 1.11，t (40) = 6.66，p = .00，r =.73）ともに，効果量も大きかった。またスピーキング活動への動機づけも上昇し，効果量は中程度であった。（M_{diff} = 0.72，t (40) = 3.54，p = .00，r =.49）。

同様に 3 欲求のすべてに上昇も見られた。自律性（M_{diff} = 1.16，t (40) = 5.50，p = .00，r = .66），有能性（M_{diff} = 0.68，t (40) = 3.24，p = .00，r =.46），関係性（M_{diff} = 0.42，t (40) = 2.24，p = .03，r =.33）の変化値は 5%水準で有意であり，効果量も中程度であった。

以上の結果から，外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーション活動は動機づけの低い学習者の 3 欲求と動機づけを高める効果が確認された。方略の詳細はデータベースとして公開する。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 9 件）

①田中博晃．（印刷中）．「特性レベルの内発的動機づけを高める授業と有能性の欲求：動機づけを高める方略による教育的介入」．JALT Journal.

②田中博晃．(2013)．「動機づけを高める方略の修正：特性レベルの内発的動機づけを高める教育的介入」．JACET Journal，56，81-106.

③田中博晃．(2013)．「仮説継承型研究による動機づけを高める研究：量的・質的データを用いて」．中国地区英語教育学研究紀要，43，11-20.

④田中博晃．（2012）．「質的研究のための評価基準:KJ 法を用いた動機づけ研究での例」．より良い外国語教育研究のための方法，2，106-120.

⑤田中博晃．（2011）．「KJ 法入門：質的データ分析法として KJ 法を行う前に」．より良い外国語教育研究のための方法，1，17-29.

⑥田中博晃．（2010a）．「英語授業への動機づけを高める要因：外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーション活動における 3 欲求の役割の検討」．JACET 中国四国支部紀要，7，1-10.

⑦田中博晃．（2010b）．「英語の授業で内発的動機づけを高める研究」．*JACET Journal*，50，63-80.

⑧田中博晃．（2009a）．「クラス内の動機づけが低い学習者の動機づけを高める実践研究」．JACET 中国四国地区紀要，6，69-82.

⑨田中博晃．（2009b）．「3 つのレベルの内発的動機づけを高める:動機づけを高める方略の効果検証」．JALT Journal，31，227-250.

〔学会発表〕（計 6 件）

①Tanaka, H.（2013）. Enhancing intrinsic motivation and satisfying the basic psychological needs. Hawaii International Conference on Education.

②田中博晃．（2012）．「動機づけを高める方略の開発と検証：仮説継承型アプローチを用いて」．第 29 回 JACET 中国四国支部大会（安田女子大学）（単独発表）．

③田中博晃．（2012）．「動機づけを高める研究：量的・質的アプローチ」．第 43 回中国地区英語教育学会（広島大学）（単独発表）．

④田中博晃・住政二郎　(2012)．「「質的研究入門:KJ 法による自由記述データ分析体験」．外国語教育メディア学会関西支部（大阪教育大学）（共同発表）．

⑤田中博晃．（2010）．「「KJ 法入門」．外国語教育メディア学会関西支部第 2 回メソドロジー研究部会（関西大学）（単独発表）．

⑥田中博晃．（2010）．「特性レベルの内発的動機づけを高める教育的介入：動機づけを高める方略の修正」．第 36 回全国英語教育学会大阪研究大会（関西大学）（単独発表）．

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
田中　博晃（TANAKA HIROAKI）
広島国際大学・看護学部・講師
研究者番号：80441575

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：